

医療の質向上に貢献する薬剤師——もの、わざに加えて“こころ”を

内山 充

薬剤師業務に関連する学問技術の急速な進歩と、医療環境における社会ニーズの大きな変化は、中身を説明するまでも無く、すでに現実となっている。我々はその中で常に、医療の担い手としての質の高い薬剤師になるという目標を持たなければならない。その目標は、単なる業務の改善や能率の向上、あるいは経験の蓄積だけでは果たせず、新たに実践的知識を創り出す努力が必要となる。

すなわち、先ず継続的な生涯学習によって、時代に即した必要な知識を身につけることである。知識の源は、一部の実務体験を除けば、大部分が多種多様の情報であるが、本来知識と言うのは、得た情報をそのまま記録や記憶したものではなく、それらを選択、評価し、整理して、身につけたものを言う。ただし、知識を、単に知っている、教えられる、だけでは薬剤師としての働きは出来ない。知識に基づいて、目的と相手によって、倫理的にも、専門職能からも、最も適切な行為を実践できるようにならなければならない。

実践的知識を得るためには、「もの」として情報（学習情報や、医薬品情報、患者情報など）が必要であることはいうまでも無い。また、「わざ」として、情報を適切に評価する能力が必要である。この点については、7月22日のコラム [「医薬品情報の評価と活用」](#) ですでに述べたので省略するが、情報—知識—動作・行為の効果的な結びつきは、「わざ」としての適正な評価能力があって初めて可能となる。

評価という仕事を決して軽視してはいけない。評価次第で、情報が活かされもするし無駄にもなる。適切な評価は、具体的な医療効果のみならず経済的にも精神的にも計り知れない効果を発揮するが、誤った評価は、医療効果を無にするばかりでなく、かえって予期せぬ混乱や危害や損失をもたらす恐れが生じる。「医学判断学」や「評価科学」の重要性を認識すべきである。

このように、情報を様々に評価して得た実践的知識に基づいて、職務上の行為をする際に、忘れてはならないのが「こころ」である。「こころ」は態度に反映され、多くの場合に無意識の動作として現れる。「生活するとは、人々が各人に固有な動作を、知らず識らずのうちに、限りなく繰り返すことだ（小林秀雄）」と言われるから、薬剤師の業務の上での毎日の動作・行為の基盤は「こころ」にあると思う。

持つべき「こころ」として、相手の求め・立場を理解し、[啐啄の機](#)を心得て、体面にこだわらず、利害に惑わされず、好き嫌いに左右されず、持論を固執せず、権威主義を捨て、パターンリズム（家父長的な温情主義）に陥らず、約束したことは守るというような心構えを持ちたいものである。これらの点について、常に自己診断と自己規制を絶やしてはならない。

薬剤師による、医療の質向上に対する実質的な貢献と、社会からの信頼獲得の成否は、豊かで貴重な情報という「もの」をもとに、生涯を通じた学習と自己努力により、各個人が、評価という「わざ」と、さらに基盤としての「こころ」を持つことができるか否かにかかっていると考える。

(2007. 11. 14)